

学業領域における基本的心理欲求充足尺度の作成

筑波大学大学院人間総合科学研究科 西村多久磨¹⁾

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系 櫻井 茂男

Development of the basic psychological needs satisfaction scale for academic domains

Takuma Nishimura (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Shigeo Sakurai (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of this study was to develop the Basic Psychological Needs satisfaction Scale for Academic domains (BPNSA) based on basic psychological needs theory and to verify its reliability and validity. This scale has three factors: need satisfaction for autonomy, competence, and relatedness. In study 1, a factor analysis of the BPNSA revealed 3 predictable factors. Additionally, the reliability of the scale was confirmed. In study 2, it revealed that BPNSA has satisfactory validity.

Key words: basic psychological needs, self-determination theory, junior high school students.

問題と目的

“学業”が、学校生活において中心的な活動となる中学校では、学業に適応できない子どもが増えてくる。新井(1996)は、学業上の問題を抱える子どもの特徴として“何もする気がない”、“不安が高すぎる”、“自己防衛する”などを挙げ、学習の量(e.g., 家庭学習の時間)や学業成績の高低のみに目を向けではならないと指摘している。学業領域に関する研究の責務として、精神的健康や適応などの個人の内面的な問題についても検討する必要性が指摘されてきた(北尾, 2002)。

自己決定理論(Self-Determination Theory; Ryan & Deci, 2000)の下位理論である基本的心理欲求理論(Basic Needs Theory)では、個人の内面的な適応状態の指標として、3つの基本的心理欲求の充足を挙げている。それらは、自律性への欲求(need for autonomy)、有能さへの欲求(need for competence)、関係性への欲求(need for relatedness)である。自

律性への欲求とは、行為を自ら起こしたいという欲求のことである。有能さへの欲求とは、個人と環境との相互作用の中で効果的にかかわり、自らの能力を発揮したいという欲求である。関係性への欲求とは、他者とのつながりを感じ、他者から大切にされたい、もしくは集団の中で所属感を持ちたいという欲求である。

3つの基本的心理欲求の充足が自己決定理論の中心に位置づけられた背景には、DeciとRyanを中心とする研究グループの膨大な研究知見の蓄積がある。中でも、大きく貢献したとされるのが、内発的動機づけ研究と自己調整の研究である(Ryan & Deci, 2000)。3つの基本的心理欲求との関連にふれながら、ここでは簡単に説明していく。

DeciとRyanが研究のスタートとして着目した現象は、子どもの内発的動機づけであった。内発的動機づけとは、報酬がない状態でも探索行動が行われ、知的好奇心によって活動が生起されている状態である。内発的動機づけの起源について、当初は、White(1959)やHarter(1978)の有能感に関する説明が有力であった。すなわち、様々な課題に興味

1) 日本学術振興会特別研究員。

を持ち、自分の力でやり遂げることで有能感が得られるため、内発的な活動が行われると考えられていたのである。ここでは人間の基本的な欲求の一つとして有能さへの欲求が仮定されている。

Deci は子どもの内発的動機づけが何故低下していくのかについて疑問を持ち、内発的動機づけを阻害する要因の研究を開始した(櫻井, 2009)。最初に Deci が着目した要因は報酬であった。当時は、行動理論により、報酬を与えることによって有能感が高まり、内発的動機づけが高まると考えられていた。しかし、ソマパズルを用いた実験研究によって、報酬によって内発的動機づけが阻害されることが明らかにされた(アンダーマイニング効果; Deci, 1971)。また、有能感を知覚しても、十分に自律性(自己決定感)を知覚していない場合、内発的動機づけが阻害されてしまうという報告もなされた(e.g., Ryan, 1982)。

このような背景から、内発的動機づけの起源として有能感だけでなく自律性が加えられ、内発的動機づけの促進及び阻害に関する説明原理として、認知的評価理論(Cognitive Evaluation Theory)が提案された(Deci & Ryan, 1985)。認知的評価理論では、知覚された因果の所在という観点が導入され、他者からの報酬により、活動者は行動の主体が、外部にあるものと知覚し、その結果、自律性が阻害され、内発的動機づけが低下されると説明された²⁾。以上の研究によって、有能感だけでなく自律性も内発的動機づけの起源であると仮定されるようになった。この段階では、人間の基本的な欲求として有能さへの欲求に加え、自律性への欲求も仮定されている。

次に、Deci と Ryan は、社会的な価値を個人がどのように自己に統合させていくのかについての自己調整の研究を始めた。この研究の背景については、認知的評価理論は内発的動機づけに限定された理論であり、一般の生活において見られるような外発的な活動に対しては適用できないことから自然な流れであったと考えられる。

Deci と Ryan が着目した点は、まず外発的動機づけにおける自律性のレベルであった。つまり、外発的動機づけの中でも自律性の高い動機づけがある一方で、自律性の低い動機づけがある点に着目したのである。この自律性のレベルに着目し、社会的な価値が自己の内面へ統合される自己調整の過程

(価値の内在化)を説明した理論が有機的統合理論(Organismic Integration Theory)である。この理論では、内発的動機づけ(内的調整)を最も自律性の高い段階とし、さらに外発的動機づけを自律性の高い順に、統合的調整、同一化的調整、取り入れ的調整、外的調整という段階に区分した。さらに、全く社会的な価値が受容されていない段階として、無調整という段階を想定した。無調整とは活動に対する価値を見いだせず、無気力の状態とされる。これら自己調整の過程において、どのように自律性の高い外発的動機づけが形成されるのかについて、Deci と Ryan は、重要な他者による社会的な価値の共有や伝達に着目した。例えば、Ryan, Stiller & Lynch (1994) は、親や教師から「見守られ、つながっている」という感覚(relatedness)を十分に感じている子どもほど、学校活動の価値を十分に認識していることを報告している。この他にも学校領域を中心に、学校での価値の内在化において、価値を共有している他者との関係性が重要であるとの報告がいくつもなされている(e.g., Grolnick & Ryan, 1989; Grolnick, Ryan & Deci, 1991)。以上のように、個人が社会的な価値を自己のものに調整し、内在化させていく過程を説明するにあたり、有機的統合理論では他者との関係性という観点が組み込まれ、説明が試みられている。このような経緯で、人間の基本的な欲求の3つ目である関係性への欲求が想定されたのであった。

Ryan & Deci (2000) によると自己調整の過程については、関係性への欲求の充足だけでなく、自律性や有能さへの欲求の充足も必要とされているが、関係性への欲求の充足は自己調整の初期段階(無調整や外的調整)で特に必要となり、価値の内在化が進むにつれ自律性や有能さへの欲求の充足が重要になるのではないかと述べている。価値の内在化の程度によって貢献する基本的な欲求は異なることが想定されているものの、以上の研究成果を踏まえ、3つの欲求が想定されたのである³⁾。その後、これらの3つの欲求は基本的心理欲求と命名され、基本的心理欲求理論(Basic Needs Theory)が提案された。

2) 報酬はアンダーマイニング効果を本当に起こすのかについては1990年代に議論が起きている。詳細は、Eisenberger & Cameron (1996)、Deci, Koestner & Ryan (1999)を参照のこと。

3) 本論文では、3つの基本的心理欲求が提案されるまでの自己決定理論研究の成果について、Ryan & Deci (2000)の論文を参考にした。ただし、「関係性への欲求の充足」については、自己決定理論において、人間の環境との適応、社会的価値と自己の統合を議論するために導入された概念でもあり(Deci & Ryan, 1991)、自己調整の研究はその一部であるとの見方もなされている。なお、自己決定理論の概要及び各下位理論については、上淵(2003)、櫻井(2009)に詳しく説明されている。

3つの基本的心理欲求が満たされることによって、個人は完全に機能した状態になり (Ryan, 1995)、well-being や自己成長、人格の発達が促されるといふ (Patrick, Knee, Canevello & Lonsbary, 2007)。

さて、基本的心理欲求理論に関する実証的研究は、職場や会社などで働く雇用者や監督者の職場満足感に関する研究がはじまりであった。Ilardi, Leone, Kasser & Ryan (1993) が開発した仕事における基本的心理欲求充足尺度を端緒に、一般的な生活における基本的心理欲求の充足を測定する尺度 (Basic Psychological Needs Scale; BPNS, Deci & Ryan, 2001) や運動領域 (Vlachopoulos & Michailidou, 2006)、特定の他者 (父、母、恋人、親友、クラスメート) との関係 (LaGuardia, Ryan, Couchman & Deci, 2000) に着目した尺度が作成されている。さらに、我が国では、大久保・長沼・青柳 (2003) が中学生、高校生、大学生を対象に BPNS を翻訳し、学校環境における基本的心理欲求の充足を測定する尺度を作成している。

以上のように領域固有の尺度が多く作成されているが、学業領域においては、3つの基本的心理欲求の充足を測定する尺度は、筆者らが知る限り未だ作成されていないのが現状である。冒頭でも述べたが、“学業” は中学生にとって学校生活の中心であり、個人の内面的な適応や精神的健康の問題を検討するために学業領域に限定した尺度を作成することは必要であると考えられる。

そこで本研究では、中学生を対象とした学業領域における基本的心理欲求充足尺度 (Basic Psychological Needs satisfaction Scale for Academic domains 以下、BPNSA) を作成することとする。尺度の信頼性は内的一貫性の検討と再検査信頼性の検討によって確認し、妥当性は以下の変数との相関分析によって検討する。

(1) 学業コンピテンス；学業全般の有能感を表す。有能さへの欲求の充足と正の相関関係が予想される。

(2) 学習動機の自律性；学習に対してどの程度自己決定ができていくかについての指標である。自己決定理論で想定されている内的調整、同一化的調整、取り入的調整、外的調整の4つが測定される。自律性の低い調整スタイル (外的調整) から自律性の高い調整スタイル (内的調整) にかけて、自律性への欲求の充足とは正の相関関係が見られ、相関係数は高くなることが予想される。

(3) 友人モラル、教師モラル；学業活動において、教師や友人と良好な関係を築けている生徒ほど、教師や友人からのサポートが受けやすいと考え

られる。したがって、友人モラル、教師モラルと、関係性への欲求の充足とは正の相関関係が予想される。

(4) 無気力的認知・思考；学校生活における種々のストレス反応の中でも、無気力的認知・思考と学業活動との結びつきは比較的強いことが指摘されている (岡安・嶋田・坂野, 1992)。自己決定理論では、3つの基本的心理欲求が満たされていない場合、健康を害することが想定されているため (Ryan & Deci, 2000)、3つの基本的心理欲求の充足と無気力とは負の相関関係が予想される。

(5) 学習モラル；学業活動における充実感や満足感を規定する指標である (河村, 1999)。Diener (1984) をはじめとする subjective well-being に関する研究では、well-being を、ポジティブな感情を多く持つ一方でネガティブな感情が少なく、さらに高いレベルの生活満足感や充実感を持つ状態を意味するものと操作的に定義されている (Oishi, Diener & Lucas, 2007)。そこで、学業場面における充実感や満足感を規定する要因として学習モラルを取り上げた。学習モラルが高いほど学業に対する充実感や満足感が高いため、3つの基本的心理欲求の充足と学習モラルとは正の相関関係が予想される。

なお、基本的心理欲求理論では、各基本的心理欲求をどの程度強く持っているかではなく、どの程度充足されているかに焦点が当てられる (Baard, Deci & Ryan, 2004)。さらに充足を表現するにあたり BPNS や海外の研究 (La Guardia et al., 2000) では、自律性、有能さ、関係性をそれぞれどの程度知覚しているかについて測定されている。そこで本研究においても、基本的心理欲求の充足については、各欲求をどの程度知覚しているかに置き換え、尺度項目を表現することとする。

以上より、本研究では学業領域における基本的心理欲求充足尺度 (BPNSA) を作成し、信頼性と妥当性を検討することを目的とする。

研究 I BPNSA の作成と信頼性の検討

方法

調査協力者 関東の公立中学校1校253名を対象とした。内訳は、中学1年生90名 (男子44名、女子46名)、中学2年生92名 (男子48名、女子44名)、中学3年生71名 (男子51名、女子20名) であった。また、この内、234名については4カ月の期間を置いて再検査信頼性の検討が行われた。

調査時期 2010年7月に実施された。再検査信

頼性の検討は2010年11月に実施された。

調査内容 学業領域における基本的心理欲求充足尺度 (BPNSA) の原案; Deci & Ryan (2002) に記載されている概念定義とBPNSの尺度項目を参考に27項目を作成した。この27項目については、第一筆者と心理学を専門とする教員の2名によって、内容的妥当性の確認が行われた。指示は「以下の項目は最近のあなたにどのくらいあてはまりますか」とし、4件法(1:まったくあてはまらない, 2:あまりあてはまらない, 3:少しあてはまる, 4:とてもあてはまる)による回答を求めた。

手続き 授業時間の一部及びホームルームの時間に集団方式で実施した。調査は学校の成績と一切関係がないこと、回答は強制ではないこと、個人のプライバシーは守られることをフェイスシートに明記した。

結果と考察

因子構造の検討 BPNSAの原案27項目に対して、最尤法・Promax回転による因子分析を行った。固有値の減少推移は、5.19, 1.56, 1.22, 0.80, …であり第3因子と第4因子の固有値の落差が比較的

きかった。そこで、因子数を3に設定し、再度同様の因子分析を行った結果、最終的に各下位尺度の上位4項目、計12項目を採用することとした(Table 1)。第1因子には“人から言われずに、自分で学習する内容を決めて勉強している”などの項目が高い負荷を示したので“自律性への欲求の充足”因子と命名した。第2因子には“学校の成績は良い方である”などの項目が高い負荷を示したので“有能さへの欲求の充足”因子と命名した。第3因子には“クラスの人と一緒に勉強することが好きだ”などの項目が高い負荷を示したので“関係性への欲求の充足”因子と命名した。以上より、基本的心理欲求理論が想定する3因子が抽出された。

内的一貫性の検討と下位尺度間の相関 尺度の内的一貫性を検討するために、Cronbachの α 係数を算出した。その結果、自律性への欲求の充足が.84、有能さへの欲求の充足が.81、関係性への欲求の充足が.81であった。以上より、尺度の内的一貫性が確認された。以後、加算得点を下位尺度得点とし分析に用いた。BPNSAの基本統計量と下位尺度間相関についてはTable 2に示した。

再検査信頼性の検討 約4カ月の期間をおき、BPNSAの再検査信頼性の検討を行った。再検査信

Table 1 学業領域における基本的心理欲求充足尺度 (BPNSA) の因子分析結果 (最尤法・Promax 回転後)

Item	F1	F2	F3	h^2
自律性への欲求の充足				
人から言われずに、自分で学習する内容を決めて勉強している	.91	.01	-.11	.74
勉強について興味のあることは、自分で調べて学んでいる	.76	-.16	.06	.51
家の人に言われる前に、進んで宿題や家庭学習に取り組んでいる	.74	.05	.01	.61
勉強についてわからないところは、できるだけ自分で調べて解決している	.56	.10	.11	.47
有能さへの欲求の充足				
学校の成績は良い方だ	-.23	.99	.01	.78
テストでは良い点数をとる自信がある	.08	.78	-.09	.62
勉強で難しいところが出てきても、たいていは理解できている	.23	.51	.00	.44
授業中、先生の質問には答えられている	.20	.42	.14	.41
関係性への欲求の充足				
クラスの人と一緒に勉強することが好きだ	-.03	-.09	.93	.79
クラスの人と一緒に勉強するのは楽しい	-.02	-.04	.85	.68
勉強で悩んだり成績が伸びなかったりしたときに、励ましてくれる先生や友達がいる	.06	.13	.48	.40
勉強のことで相談できる先生や友達がいる	.14	.23	.40	.34
	因子間相関	F1	.57	.57
		F2		.41

Table 2 学業領域における基本的心理欲求充足尺度 (BPNSA) の基本統計量と下位尺度間相関及び再検査信頼性係数

	M	SD	②	③	再検査信頼性係数
① 自律性への欲求の充足	9.66	3.22	.54**	.52**	.64**
② 有能さへの欲求の充足	8.66	2.79		.43**	.69**
③ 関係性への欲求の充足	10.34	3.25			.58**

注) ** $p < .01$.

頼性係数の値は、自律性への欲求の充足が $r = .64$ ($p < .01$)、有能さへの欲求の充足が $r = .69$ ($p < .01$)、関係性への欲求の充足が $r = .58$ ($p < .01$)であった。これらの結果から、尺度の再検査信頼性が確認された。

学年差と性差の検討 各基本的心理欲求の充足について、学年差と性差を検討するために、性と学年を独立変数、各基本的心理欲求の充足を従属変数とする二要因の分散分析を行った (Table 3)。自律性への欲求の充足については、学年の主効果が5%水準で有意であったため、Tukey法による多重比較を行った。その結果、1年生が3年生よりも得点が高かった。また、関係性への欲求の充足については、性別の主効果が5%水準で有意であり、女子の方が男子よりも得点が高かった。

以上、内的一貫性と再検査信頼性が検討され、BPNSAの信頼性が確認された。また基本的心理欲求の充足については、一部の低位尺度において学年差と性差が見られた。

研究Ⅱ BPNSAの妥当性の検討

方 法

調査協力者 関東の公立中学校1校230名を対象とした。内訳は、中学1年生72名(男子36名、女子36名)、中学2年生84名(男子42名、女子42名)、中学3年生74名(男子43名、女子31名)であった。

調査時期 2010年11月に実施された。

調査内容 (1) BPNSA; 研究Ⅰで作成された尺度12項目を用いた。教示法と評定法は研究Ⅰと同様であった。

(2) 学業コンピテンス; 桜井(1992)が作成した児童用コンピテンス尺度の学業領域に関する項目を用いた。5項目に対して4件法による回答を求めた。

(3) 学習動機の自律性; 西村・河村・櫻井(2011)

の自律的学習動機尺度を用いた。この尺度は有機的統合理論に想定されている内的調整、同一化的調整、取り入れ的調整、外的調整が測定される。20項目に対して4件法による回答を求めた。

(4) 学習モラル、友人モラル、教師モラル; 河村(1999)のスクールモラル尺度から学業、友人、教師領域に該当する項目を用いた。項目得点が高いほど、当該領域における活動の充実度、満足度が高いことを示す。各4項目に対して5件法による回答を求めた。

(5) 無気力的認知・思考; 岡安・嶋田・坂野(1992)の中学生用ストレス反応尺度の低位尺度“無気力的認知・思考”を用いた。12項目中、特に学業場面に関連がある7項目に対して4件法による回答を求めた。

手続き 調査は授業時間の一部及びホームルームの時間に集団方式で実施した。結果は学校の成績と一切関係がないこと、回答は強制ではないこと、個人のプライバシーは守られることをフェイスシートに明記した。

結 果

BPNSAの妥当性を検討するために、妥当性用の尺度との相関分析を行った (Table 4)。その結果、まず、自律性への欲求の充足と、内的調整、同一化的調整との間に中程度の正の相関関係(順に、 $r = .48, 44, p < .01$)が示され、取り入れ的調整とは $r = .33$ ($p < .01$)、外的調整とは $r = -.05$ (*n.s.*)であった。予想通り、自律性の高い調整スタイルとは正の相関関係が見られ、自律性の程度が高くなればその正の関係は強まることが確認された。また、有能さへの欲求の充足と学業コンピテンスの間に強い正の相関関係($r = .73, p < .01$)が示され、関係性への欲求の充足についても、友人モラル、教師モラルとそれぞれ中程度の正の相関関係(順に、

Table 3 学業領域における基本的心理欲求充足尺度 (BPNSA) の二要因分散分析の結果

	1年生		2年生		3年生		学年の主効果	性別の主効果	交互作用
	男子 (<i>n</i> =44)	女子 (<i>n</i> =46)	男子 (<i>n</i> =48)	女子 (<i>n</i> =44)	男子 (<i>n</i> =51)	女子 (<i>n</i> =20)			
自律性への欲求の充足	9.59 (3.53)	11.11 (3.63)	8.87 (2.80)	10.09 (2.39)	9.16 (3.33)	8.72 (2.93)	3.85 ** 3年<1年	3.45 <i>n.s.</i>	1.91 <i>n.s.</i>
有能さへの欲求の充足	8.84 (3.02)	9.23 (3.03)	8.87 (2.80)	8.54 (2.30)	8.20 (2.89)	7.81 (2.23)	2.51 <i>n.s.</i>	0.85 <i>n.s.</i>	0.52 <i>n.s.</i>
関係性への欲求の充足	9.84 (3.61)	11.65 (3.37)	9.83 (2.87)	11.20 (2.59)	9.79 (2.92)	9.22 (3.11)	2.95 <i>n.s.</i>	4.40 ** 男<女	2.73 <i>n.s.</i>

注1) ** $p < .01$, * $p < .05$.

注2) () は標準偏差を表す。

Table 4 学業領域における基本的心理欲求充足尺度 (BPNSA) と妥当性を検討するための変数との相関係数

	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
① 自律性への欲求の充足	.54**	.42**	.44**	.48**	.44**	.34**	-.01	.12	.23**	.59**	-.33**
② 有能さへの欲求の充足		.36**	.73**	.51**	.45**	.38**	.08	.20**	.20**	.56**	-.37**
③ 関係性への欲求の充足			.36**	.41**	.35**	.36**	.25**	.49**	.45**	.51**	-.29**
④ 学業コンピテンス				.44**	.36**	.33**	.21**	.11	.22**	.58**	-.44**
⑤ 内的調整					.61**	.55**	.20**	.17**	.31**	.48**	-.35**
⑥ 同一化的調整						.53**	.19**	.21**	.27**	.55**	-.27**
⑦ 取り入れの調整							.53**	.20**	.29**	.39**	-.18**
⑧ 外的調整								.20**	.20**	.12	.17**
⑨ 友人モラル									.38**	.27**	-.16*
⑩ 教師モラル										.32**	-.21**
⑪ 学習モラル											-.43**
⑫ 無気力的認知・思考											

注) ** $p < .01$, * $p < .05$.

$r = .49, .45, p < .01$) が示された。さらに、学習モラルについても3つの基本的心理欲求の充足との間に正の相関関係が示され ($r = .51 \sim .59, p < .01$)、無気力については、3つの基本的心理欲求の充足との間に負の相関 ($r = -.29 \sim -.37, p < .01$) が示された。以上より、予想通りの関連が確認され尺度の併存的妥当性が確認された。

全体的考察

研究 I では、学業領域における基本的心理欲求充足尺度 (Basic Psychological Needs Satisfaction Scale for Academic Domains; BPNSA) が作成され、自律性への欲求の充足、有能さへの欲求の充足、関係性への欲求の充足の3因子から構成される尺度が作成された。また、尺度の内的一貫性と4カ月の期間を置いての再検査信頼性も確認された。Deci, Egharari, Patrick & Leone (1994) で示されているように、自己決定理論では、3つの基本的心理欲求の充足は、個人が十分に機能しポジティブな結果をもたらすための操作 (介入) 変数とされている。しかし、再検査信頼性の検討において4カ月の期間においても中程度以上の正の関連が得られたということは、操作変数でありながらも、時間的に一定の安定性があることを意味している。したがって、これらの結果は、中学生に対して学業領域における3つの基本的心理欲求は、教師が日常場面において意図的に操作しなければ変化が小さい変数であることを示していると考えられる。

学年差と性差の検討においては、まず自律性への欲求の充足について3年生よりも1年生が高いことが示された。Wigfield, Byrnes & Eccles (2006) は、中学生の段階では学習活動において課題などに対す

る自己選択の機会が少ないことを指摘しており、その経験の積み重ねによって、3年生の方が1年生よりも低かったのではないかと推察される。また性差については、関係性への欲求の充足について見られ、女子の方が男子よりも高かった。学校環境における尺度を作成した大久保・長沼・青柳 (2003) でも同様の報告がなされているが、中学生では女子の方が男子よりも他者に対する親和動機が高く (杉浦, 2000)、かつ学校生活における社会的スキルが高い (飯田・石隈, 2002) ため適切な対人関係を構築しやすいものと考えられる。そのため女子の方が男子よりも関係性への欲求の充足が促されているものと考えられる。

次いで、研究 II では、BPNSA の妥当性の検討が行われた。自律性への欲求の充足については、自律性の高い調整スタイルほど、自律性への欲求の充足との関連が強く、自律性の低い調整スタイルほどその関連は弱まること示された。自律性への欲求の充足と取り入れの調整との間に弱い正の相関関係が示された点については、以下のように考えられる。取り入れの調整は、自律性の低い段階とされているが一応の自己決定ができていない段階とされている (Deci & Ryan, 2002)。よって、弱いながらも正の相関関係が示された点については十分に解釈可能な結果であると考えられる。さらに有能さへの欲求の充足については、学業コンピテンスとの強い相関関係が示され、関係性への欲求の充足についても、友人モラル及び教師モラルと予想通りの正の相関が確認された。また3つの基本的心理欲求の充足は、無気力と負の相関、学習モラルと正の相関が示され、以上より、BPNSA の妥当性が確認されたと考えられる。

さて、本来ならば、基本的心理欲求理論は生活全

般を対象とした理論であり、領域固有の尺度が多く作成されている点は、一見、理論に矛盾しているように思われる。しかしながら、基本的心理欲求理論の始まりが労働者を対象とした職場満足感の研究であったように、各年代によって生活の中心となる活動に対して多くの検討が必要になると思われる。こうした意味において、学業領域に限定されているものの、基本的心理欲求理論によるアプローチから精神的健康や適応などの個人の内面的な問題について検討が可能になった点において、BPNSAの作成は意義があったと考えられる。

最後に、今後の課題と展望について2点述べる。第一に、BPNSAの妥当性の検討が併存的妥当性の検討のみに偏ってしまった点を補う必要があると考えられる。特に、自律性への欲求の充足と有能さへの欲求の充足については、想定通りの相関係数が得られたものの妥当性の検討のために用いた変数との相関係数値の正負の傾向及び大きさは類似していた。したがって、この2つの下位尺度の弁別性については十分に示されているとは言い難い。弁別性を示すことは困難であるとの指摘⁴⁾がなされているものの(櫻井, 2009)、今後は、下位尺度間の弁別的妥当性についても検討し、複数の妥当性に関する知見を積み重ねBPNSAの構成概念妥当性を確認していく必要がある。

第二に、BPNSAを用いて各基本的心理欲求の充足と学習動機づけとの関連について詳細に検討する必要があると考えられる。有機的統合理論では、3つの基本的心理欲求の充足が自律的な学習動機づけを高めることが想定されているが、個人の価値の内在化の程度によって寄与する基本的心理欲求は異なることが想定されている(Ryan & Deci, 2000)。上記の仮説については、理論的予想の域を超えておらず、実証的検討が不足している。今後の重要な課題である。

引用文献

- 新井邦二郎 (1996). 教室の動機づけの理論と実践
金子書房
- Baard, P.P., Deci, E.L. & Ryan, R.M. (2004). Intrinsic need satisfaction: A motivational basis of performance and well-being in two work settings. *Journal of Applied Social Psychology*, **34**,

2045-2068.

- Deci, E.L. (1971). Effects of externally mediated rewards on intrinsic motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **18**, 105-115.
- Deci, E.L., Eghrari, H., Patrick, B.C. & Leone, D. (1994). Facilitating internalization: The self-determination theory perspective. *Journal of Personality*, **62**, 119-142.
- Deci, E.L., Koestner, R. & Ryan, R.M. (1999). A meta-analytic review of experiments examining the effects of extrinsic rewards on intrinsic motivation. *Psychological Bulletin*, **125**, 627-668.
- Deci, E.L. & Ryan, R.M. (Eds.) (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum.
- Deci, E.L. & Ryan, R.M. (1991). A motivational approach to self: Integration in personality. In R. Dienstbier (Ed.), *Nebraska symposium on motivation: Perspectives on motivation* (pp.237-288). Vol.38, Lincoln, NE: University of Nebraska Press.
- Deci, E.L. & Ryan, R.M. (2001). *Questionnaires: Basic Psychological Needs Scales*. Retrieved September 11, 2001, from <http://www.psych.rochester.edu/SDT/measures/needs.html>
- Deci, E.L. & Ryan, R.M. (Eds.) (2002). *Handbook of self-determination research*. Rochester, NY: University of Rochester Press.
- Diener, E. (1984). Subjective well-being and ill-being. *Psychological Bulletin*, **93**, 542-575.
- Eisenberger, R. & Cameron, J. (1996). Detrimental effects of reward: Reality of myth? *American Psychologist*, **51**, 1153-1166.
- Grolnick, W.S. & Ryan, R.M. (1989). Parent styles associated with children's self-regulation and competence in school. *Journal of Educational Psychology*, **81**, 143-154.
- Grolnick, W.S., Ryan, R.M. & Deci, E.L. (1991). Inner resources for school achievement: Motivational mediators of children's perceptions of their parents. *Journal of Educational Psychology*, **83**, 508-517.
- Harter, S. (1978). Effectance motivation reconsidered: Toward a developmental model. *Human Development*, **1**, 1153-1166.
- 飯田順子・石隈利紀 (2002). 中学生の学校生活スキルに関する研究—学校生活スキル尺度(中学生版)の開発— *教育心理学研究*, **50**, 225-

4) 櫻井 (2009) は、個人が十分に機能し自律的に振る舞っている状態のときは、多くの場合、3つの基本的心理欲求は同時に充足されていることを指摘している。

- 236.
- Iardi, B.C, Leone, D., Kasser, T. & Ryan, R.M. (1993). Employee and supervisor ratings of motivation: Main effects and discrepancies associated with job satisfaction and adjustment in a factory setting. *Journal of Applied Social Psychology*, **23**, 1789-1805.
- 河村茂雄 (1999). 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発 (2) — スクール・モラル尺度 (中学生用) の作成 —. *ウンセリング研究*, **32**, 283-291.
- 北尾倫彦 (2002). 学習不適応の心理と指導 開隆堂出版株式会社
- LaGuardia, J.G., Ryan, R.M., Couchman, C.E. & Deci, E.L. (2000). Within-person variation in security of attachment: A self-determination theory perspective on attachment, need fulfillment, and well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 367-384.
- 西村多久磨・河村茂雄・櫻井茂男 (2011). 自律的な学習動機づけとメタ認知的方略が学業成績を予測するプロセス—内発的な学習動機づけは学業成績を予測することができるのか?— *教育心理学研究*, **59**, 77-87.
- Oishi, S., Diener, E. & Lucas, R.E. (2007). The optimum level of well-being: Can people be too happy? *Perspectives on Psychological Science*, **2**, 346-360.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 (1992). 中学生用ストレス反応尺度の作成の試み 早稲田大学人間科学研究, **5**, 23-29.
- 大久保智生・長沼君主・青柳 肇 (2003). 青年期における心理的欲求の充足と適応感との関連 *ヒューマンサイエンスリサーチ*, **12**, 21-28.
- Patrick, H., Knee, C. R., Canevello, A. & Lonsbary, C. (2007). The role of need fulfillment in relationship functioning and well-being: A self-determination theory perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*, **92**, 434-457.
- Ryan, R.M. (1982). Control and information in the intrapersonal sphere: An extension of cognitive evaluation theory. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 450-461.
- Ryan, R.M. (1995). Psychological needs and the facilitation of integrative processes. *Journal of Personality*, **63**, 397-427.
- Ryan, R.M. & Deci, E.L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, **55**, 68-78.
- Ryan, R.M., Stiller, J. & Lynch, J.H. (1994). Representations of relationships to teachers, parents, and friends as predictors of academic motivation and self-esteem. *Journal of Early Adolescence*, **14**, 226-461.
- 櫻井茂男 (1992). 小学校高学年における自己意識の検討 *実験社会心理学研究*, **32**, 85-94.
- 櫻井茂男 (2009). 自ら学ぶ意欲の心理学—キャリア発達の視点を加えて— 有斐閣
- 杉浦 健 (2000). 2つの親和動機と対人的疎外感との関係—その発達の变化— *教育心理学研究*, **48**, 352-360.
- 上淵 寿 (2000). 動機づけ研究の最前線 北大路書房
- Vlachopoulos, S.P. & Michailidou, S. (2006). Development and initial validation of a measure of autonomy, competence, and relatedness in exercise: The Basic psychological needs in exercise scale. *Measurement in Physical Education Science*, **103**, 179-201.
- White, R.W. (1959). Motivation reconsidered: The concept of competence. *Psychological Review*, **66**, 297-333.
- Wigfield, A., Byrnes, J.P. & Eccles, J. S. (2006). Development during early and middle adolescence. In P. A. Alexander & H.W. Philip (Eds.), *Handbook of Educational Psychology* (pp.87-114). Division 15 of the American Psychological Association.

(受稿4月11日: 受理5月11日)